

平成二十九年新作名刀展の概要

表彰式・講評・受賞のことば

当協会主催「平成二十九年新作名刀展」は、作品の受付期間を四月三日(月)から五日(水)までとし、四月十二日(水)に協会四階講堂において部門別に審査が行われた。審査員は「作刀の部」

一一名、「刀身彫の部」六名、「彫金の部」六名であった。

出品総数は七八点で、その内訳は無鑑査が二二点(作刀の部二一点、彫金

の部二一点)、無鑑査を除く出品数は六六六点(作刀の部三八点、刀身彫の部三二点、彫金の部二五二点)である。

厳正な審査の結果、特賞には作刀の部四名が選ばれた。

一 全部門を通じて入賞者は三二名で、特賞は、作刀(太刀・刀・脇指・薙刀・槍)の部では、高松宮記念賞に久保善博氏、薫山賞に森國利文氏、寒山賞に

高見一良氏（平七）、協会会長賞に小宮早陽光氏が選ばれた。

優秀賞は一一名(作刀の部六名、刀身彫の部二名、彫金の部三名)、努力賞一七名(作刀の部一〇名、刀身彫の部一名、彫金の部六名)であった。入選者は三四名(作刀の部一八名、彫金の部一六名)となっている。

表彰式は、四月二十八日(金)午後一時から当協会四階講堂で行われ、総務部長から経過報告があり、酒井会長より主催者挨拶、引き続き特賞以下の受賞者に対し賞状、賞金、副賞が授与された。入選者への証書の授与の後、各部門別に上林恒平(作刀の部)、橋本晴雄(刀身彫の部・彫金の部)各氏の講評、受賞者代表として高松宮賞受賞の久保善博氏の答辞があった。この後、協会の無鑑査選任規程第三条に基づく無鑑査選任基準を満たしていることから、久保氏には無鑑査資格が授与され、表彰式は滞りなく終了した。

無鑑査及び入選以上の全作品は、六月十四日(水)から七月六日(木)まで山



表彰式会場

形県の致道博物館にて、八月四日(金)から同月二十七日(日)まで岡山県の備前長船刀剣博物館にて、九月九日(土)から同月二十四日(日)まで埼玉県の大宮市立博物館にて、以上の三方所で巡回開催される。

刀剣博物館では新博物館オープン記念展示として、平成三十年新春に両国にて展示公開の予定である。



審査員



協会役職員

主催者挨拶

公益財団法人

日本美術刀剣保存協会

会長 酒井 忠久

平成29年新作名刀展の表彰式にあたり、ひとことご挨拶いたします。

高松宮記念賞を受賞された久保刀匠始め日々研鑽と技術錬磨に過ごされている受賞者の皆様、本日は誠にありがとうございます。

心からお祝いを申し上げたいと思います。

昭和23年に当協会が設立され、昭和43年にこの代々木の地に移りました。それから49年が経ち、今日がこの代々木の最後の表彰式になります。非常に感慨深いものがありますが、記念すべき表彰式ではないかなと思います。そして表彰された皆様方の作品は、今度新しく刀剣文化の拠点となる両国で、オープニングで展示をさせていた主催者挨拶・酒井会長



高松宮記念賞・久保善博氏

だきます。これも新しい歴史を刻む第一歩であり、本当に記念すべきものと思っております。

皆様方におかれましては、新しく両国に博物館ができましたらそこを拠点としてご活用いただき、皆様の刀剣博物館として、大いに刀剣文化の発展と発信を担われ、ますますご活躍されることを心より祈念してお祝いの言葉といたします。

本日はおめでとうございます。

作刀の部

審査員講評

上林 恒平

平成二十九年の新作名刀展、本当に



薫山賞・森國利文氏

おめでとうございます。この展覧会は前身の作刀技術発表会から数えるとは回になりますか。刀鍛冶にとつては、誠に大切な発表の場になっています。毎年この機会を作つてくださる協会に、心より感謝を申し上げます。

日本刀は、七十二年前の敗戦を境に、没収廃棄の運命にありました。これを救つてくださったのが、当協会設立に尽力されました本間薫山、佐藤寒山両先生です。敗戦直後、GHQに働きかけ、日本刀を守ると同時に作刀の道も残してくれました。

その後現在まで、刀剣界はさまざまながあつたと思えます。そんな



寒山賞・高見一良氏

か、第十代の会長に酒井忠久先生が就任されました。酒井会長は両先生とは大変に近い方です。私はこの話を伺った時、最初に考えたのが、刀に対する先人の想いが新会長を選んだのではなにかということでした。

先人が敗戦のなかから守つた日本刀。多くの人が刀のために命懸けで働いた時代、もう一度立ち止まって原点を振り返つて欲しい。この先人の想いが新会長に繋がっていると理解しています。

では講評に入ります。個々の評は控えさせていただきますが、少し気になる点、また特に若い人に参考にしてもらえるような点を話してみたいと思

います。

上位の方で、地刃はよくできていながら姿に難のある作品が少しあったと思います。また莖が雑な人、持って重い刀も気になりました。

健全な名刀は現代刀より重いものがあります。しかし、その重量感はいっとうりとした気持ちの良いものだと思います。周りの作品をよく見て、来年に生かしてください。

若い人に言いたいことの一つは、自分の目を養うこと。もう一つは、刀について信頼できる人を一人だけ決めることです。

私の弟子の時の話をしてみたいと思

作刀の部講評・上林恒平氏



います。師の所に岐阜の高羽誠氏が勉強に来るようになり、ある時、出品刀を鍛冶押しの状態で持ってきたものを私が窓開けしました。

刃文の構成と匂口に動きがあり、師に「古刀を観るようで面白いと思えます」と言った所、「偶然にできたような

刃では駄目だ。自分で焼こうとした刃文でなければ」と言われました。

ところが、審査から帰ってきた後に私を呼び、「他の審査員の先生方がみなお前と同じ意見だった。自分も見方に気を付けないといけない」と言われました。そのすぐ後に、「目が見えてくると、物を作るのが辛くなるぞ」とボソツと言われたことを、今でもはつきり覚えています。それでも目を養うことは大切だと思います。

もう一つ、私は刀の姿には少し自信を持っていきます。若い時に信頼している人に太刀姿を見ていただいたことがあります。この方は一目見るなり、「良

い太刀姿だ」と言ってくれました。その後すぐに、「一寸位上がりついている姿だけ」と言い、少し区送りされている長光を出してくれました。本当にびっくりしました。私はこの人に褒めて欲しくてぶつかっていったのです。

なぜこのようなことを言うのかというと、若い人で仕事が上手くても、あと一歩の人が何人もいるからです。刀身に対しての刃文の構成等、作る目がなければ良いものできません。また、刀は十人いればみな違うことを言います。これでは若い人は混乱してしまいます。

協会には目利きの学芸員が多くいます。こういう方々に本気でぶつかって下さい。結果は出てくると思います。来年を楽しみにしています。

刀身彫の部・彫金の部

審査員講評

橋本 晴雄

本日は全国各地から多数のみなさまのご出席を賜りありがとうございます。今年の新作名刀展においても多数出品され、四月十二日に文化庁の立ち合いの下で厳正に審査が行われました。

刀身彫刻と彫金の分野においては、この数年は出品点数が増加する傾向にあります。彫金の部で二十五点はこの数年来で最も多数にのびりました。



協会会長賞・小宮早陽光氏



優秀賞受賞者代表・高田欣和氏



努力賞受賞者代表・伊藤桂子氏



これも制作者や協会を始めとする関係者みなさまの研鑽と努力の成果であると、心からお祝い申し上げます。

まずは、**刀身彫の部**から講評を申し上げます。刀身彫りは今年は三点出品されました。これはほぼ例年並みの点数です。優秀賞は片山重恒さんと柏木重光さんのおふたり、努力賞は入江万里さんでした。作品はいずれも甲乙つけがたい水準であり、それは審査員の採点にも現れていました。

優秀賞・片山重恒さんの「**樋中真の俱利伽羅**」は大身槍に彫ったもので、これは日本号の彫りを意図したものであろうと思います。彫刻も日本号を意識して、ザツクリと彫って力強い勢いを出しているながら、彫りには破綻もムラもなく、たいへんよく仕上がっていると思います。この辺りが多くの票を集めた理由でしょう。

優秀賞・柏木重光さんの「**梅籠・梵字・護摩箸・蓮台**」は、彫刻の各部に

鑿がよく利いており、緻密にムラなく彫っています。各部分の肉取りがよいので、複雑な梅籠の彫刻に立体感を生んでおり、たいへん優れています。その他、梵字・護摩箸・蓮台の彫りも綺麗に整っていることと併せて、彫物総体が高く評価されました。

努力賞・入江万里さんの「**不動明王福聚海無量**」は、不動明王の複雑な構成を巧みに彫り上げており感心いたしました。不動明王や人物などの身体の肉置きを彫るのは難しいだろうと思いますが、身体各部に抑揚や筋肉の動きがもう少し感じられると更に評価が上がると思います。

以上、出品作について短評を申し上げますが、刀身彫の特性や制作上の難しさを考えますと、出品の三点はいずれも高い水準に達しており、伝統技術の継承という観点からは多いに安堵いたしましたことを申し添えます。

次に**彫金の部**です。無鑑査の長嶺雅臣さんの作品を含め全部で二十六点の作品が出品されました。この内には海外の三名の方の作品が含まれています。

優秀賞が三名で、川島義之さん、柳川清次さん、長内勝義さん。努力賞が六名で、伊藤恒颯さん、山下秀文さん、福興裕毅さん、武田守夫さん、大川雅見さん、高橋正樹さんでした。入選さ

れた方が十六名で、落選はございませんでした。全体について申し上げますと、今年の出品作は多くが鐔でしたが揃金具と縁頭の出品もありました。鉄の透鐔を主体とした作品の割合が多く、金工鐔は透鐔に比べると少数で、これは例年と同じ傾向でした。

出品作品を見ますと、制作者の個性と多様性があり、みなさまが鐔作りで没頭されている姿がよく覗えました。実用を離れた時代に、伝統工芸の世界で独自の作風を高い水準で追い求めることはたいへん困難なことであろうと拝察し、まずは敬意を表する次第です。拝見する立場としては、感心しつつ楽しく鑑賞することが出来たことは大きな喜びでした。制作者のみなさまにはますます優れた作品を作っていたいただきたいとお願ひ申し上げます。

では、優秀賞と努力賞の作品について、若干感想を申し上げます。

優秀賞・川島義之さんの「**妙法蓮華經觀世音菩薩文字透鐔**」ですが、鐔の形、透の具合、錆付け等たいへんお手であると思います。とりわけ錆付けや全体の造形が以前よりもかなり向上して、拝見して安心感があります。鐔全体の形や肉置き、耳の作りも均整がとれていて、気持ちのよい作品です。文字と透の均衡が以前よりよく整って、

お気持ちに余裕が出てきたように拝見しました。

平地の肉置きや透の内側も変化があって優れていると思います。古作を吸収しながら、古作の写しでもない川島さんらしく、清潔で透明感のある作風が一段と磨かれてきたようで感心いたしました。

柳川清次さんの「**朝まだき図鐔**」について、柳川さんは粟穂を最も得意とされていますが、この数年は粟穂も安定して一段と細密に制作されています。今回は粟穂に限らず鐔全体が一段と整ってきたと思います。とりわけ切羽台や両櫃穴、耳の作りなどが目に見えて向上しています。これは基本的に最も大切な部分だと思っています。

また、図柄の構成にも工夫をこらして独自の作風を追求されている点は素晴らしいことだと思います。魚子が更に改善されれば一段と優れた作品になると思います。

長内勝義さんの「**葡萄蝶文図鐔**」は、素銅地に各種の色がねを象嵌して、埋忠明寿の作意に倣ったものですが、技術的に精緻で下地の仕上げも丁寧です。象嵌も緻密で、見た目にも華やかで綺麗に仕上がっています。高い精度で埋忠の作品に迫っているところにはたいへん感心いたしました。今後明寿の

作品に做られるのであれば、実作を身近に検討されることをお勧めいたします。まずまず精進なさって、長内さんらしい作品をめざされることを期待します。

次に努力賞の六人の方について申し上げます。伊藤恒颯さんの「舞蝶透鐔」を拝見して最初の印象は、恒颯さんの

たおやかな感性を感じました。古作そのままの写しでなく、作者の感性と技術がよく現れています。透の意匠にも流れるような動きがあつて優れていると思います。今後は古作の上位作品をますます研究されて、実用の時代の実用性とはどういうことかを探究されるところと向上すると思います。

山下秀文さんの「武鑑透象嵌鐔」は、たいへん精巧で目に鮮やかな印象を受けました。長い日数を費やして根気よく制作された作品であることがよく分かります。肥後金工の古作を念頭に置きながら、独自の工夫を重ねた跡が現れており、成功していると思います。技術的には既に優れておられるので、鐔下地、鍔付け、象嵌、意匠など更に工夫と改善を重ねて独自の作風を確立されるよう期待しています。

福與裕毅さんの「八ッ橋透鐔」は、京透を手本にしながら、既に模作の域を脱して独自の作風を確立されています。

す。清潔で明るい作品は大きな魅力を持つています。鐔の形や肉置き、柄箱の構成が綺麗に整っている上に、透際や鍔付けのような地味なところもかなり向上しています。望むところがあるとするなら、杜若の花の数を奇数にするよりよいと思います。

武田守夫さんの「不動三尊透鐔」は、武田さんが得意とする水戸一柳友善風な作品です。肉彫りは制作時間が長かつたであろうと推測されるもので、細部まで手間の入った作品でした。以前よりも肉彫りの透際の処理が改善されていてよいと思います。鍔付けも改善されましたが、まだ少しムラな部分がありますので、そこが改善されると更によいと思います。

大川雅見さんの「水飲牛透鐔」は、水を飲む牛の姿が肉彫りで表されて動きがあります。さながら越前の記内や春田の作を思い起こさせる風情があり、優れた作品に仕上がっています。その点が高い評価に繋がったものと思えます。せつかくの出来上がりですから、切羽台の形を整えて、銘ももう少し丁寧に切るように留意されると更によいと思えます。

高橋正樹さんの「木目金地鐔」は、表裏を昼夜の貼り合わせにし、それぞれ混ぜがねをした地金で、独自の味を

出しています。金工技術も良好で、破綻がありません。今後は、表裏の平地の肉置きに動きを付けるようにされると更によくなるだろうと思います。

この他、努力賞には入りませんが、上野宏樹さんの「樵透鐔」や、上野宏樹さんの「桜花図掬金具」などに新しい息吹と可能性を感じました。

彫金の部で出品点数が増える傾向があるのは大変嬉しいことですが、優秀賞や努力賞を得られた作品と、入選作品の間には少し開きがあるようにも思います。今後は、更に技術的な向上に努力しながら古作を研究されること、無鑑査や上位の賞を獲得した作品を参考にして、上を目指して来年も優れた作品を多数出品くださるようお願いいたします。

受賞のことは

作刀の部

出会いに感謝

久保善博

早いもので、刀の世界に飛び込んで

から二十八年が過ぎました。この度、新作名刀展で高松宮記念賞を受賞し、念願の無鑑査に認定されました。これまで刀鍛冶としてやってこられたのは、人との出会いに恵まれていたからだと思っています。

感謝の気持ちも込めて、その出会いを紹介したいと思います。

入門のきっかけ 大学院一年生の時にテレビ番組を観て、「この手で古名刀を再現したい！」と思い、私は刀匠に在ることを決意しました。刀匠がどこにいるかわからず途方に暮れていた時、根津美術館で研ぎの実演をしていた藤代興里先生に出会いました。藤代先生から東京在住の刀匠を紹介され、最初に会った刀匠の吉原義人師匠に入門したのですから、あの時の藤代先生との出会いが、私の人生を決めたのだと思っています。

東京での刀鍛冶修業 平成元年、大学院修了後、親の反対を押し切って弟子入りしました。封建的だと予想していた修業は、意に反してとても自由でした。

頭ごなしに考えを押し付けられることはなく、「上手くなりたければ一生懸命努力すればいいし、そうでなければ遊んでいても構わない」というのが師匠の口癖でした。弟子の自主性を重ん



特賞受賞者

じる指導は、考えることが好きな私にはとても合っていました。手本は一流、その上仕事を沢山させて貰えたのですから、上手くなって当然だったと思います。「良い手本を見せ、仕事を沢山させる」という私の弟子育成法は、実はこの修業中に学んだものです。

また修業中は夏休みが充分にあつたので、自転車で全国の鍛冶屋を訪ねて回りました。その貧乏旅行で宗勉刀匠や天田昭次刀匠にお会いし、素材の重要性を教えて貰ったことが、後に「たたら製鉄」を勉強するきっかけになりました。

島根でのたたら修業 鍛冶修業が四

年を過ぎた頃、たたらを学びたいと思い、ヒッチハイクで島根の日刀保たたらを訪ねました。突然の訪問に木原明村下は丁寧に対応して下さい、「たたらを学びたいのなら横田に來なさい」と言つて下さいました。木原村下のお蔭で、独立後すぐに自分の仕事場を持つてスタートすることができました。同時に日立金属の専門家から金属学を学べたことも、大きな財産になりました。

映りの研究 平成十三年に庄原市に鍛錬場を建て独立した頃から、たたら製鉄と映りの研究を本格的に開始しました。古刀の映り調査では藤代先生に随分とお力添えをいただきました。平成十八年に映りが出せるようになった頃から、篠崎公紀先生に刀を研いで貰えるようになり、これが私の刀の評価を高めた大きな要因だと思っています。

その他にも多くの刀職者にお世話になりました。そして私の刀を求めて下さる方の応援なしに今日の私は存在しません。私の無鑑査認定を我が事のよう喜んでくださる方々に、少しでも恩返し出来たことを嬉しく思います。

古名刀再現はまだ道半ばです。今後は、たたら製鉄の研究成果を地鉄に反映できるように、全力で刀造りに取り組んでいきたいと思っています。

温故知新

高見 一良

(國一)

この度、出品刀が高い評価をいただきありがとうございます。この場をお借りし、研ぎ師、白銀師、鞆師の職方をはじめ、応援、ご支援くださる皆様に心よりお礼を申し上げます。

平成十年六月、親方の元よりこの新作名刀展に初出品しました。そしてこの代々木にある刀剣博物館での表彰式に初めて出席したのです。私は入選でしたが、受賞された先輩たちはとても眩しく羨ましい気持ちでいっぱい、私もあの大きな賞状とトロフィーをいつかこの手に掴みたいと思っています。手をしました。あの日から十九回目の表彰式となりました。

苦しかったこと、悲しかったこと、嬉しかったことなど、多くの思い出がこの刀剣博物館にはあります。新刀剣博物館への移転のためこれでお別れですが、最後に寒山賞を受賞することが出来、本当に良かったです。

今回の新作名刀展は、大阪城での開催がなくなつて以来久しぶりに西日本(備前長船刀剣博物館)で開催されます。

近畿、中国地方にも沢山の愛刀家がおられますので私たち刀工にとっては嬉しい限りです。一人でも多くの方に見ていただけるよう努力し、現代刀の魅力をアピールしていきたいと思っています。

全国三カ所の巡回展の後、平成三十年一月には両国の新博物館で刀剣研磨・外装技術発表会との合同企画展が行われる予定ですが、この展示がどのような展示になるのか今からワクワクしております。酒井忠久会長をはじめ当協会が私たち刀職者を大切にまた応援してくださることが何よりも嬉しく協会の心意気を感じております。

来年の表彰式は新刀剣博物館で行われます。心新たに名刀のイメージを絶えず心に持ちながら日々を過ごし、少しでも名刀に近づけるように作刀に打ち込みたいと思います。

最後になりましたが、今後とも応援、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。

感謝

小宮早陽光

(國光)

この度は、日本美術刀剣保存協会会長賞という思いもよらぬ賞をいただき、

ただただ驚いています。まだ信じられ
ません。

このような賞をいただけたのも、一
緒に仕事をしている兄や甥、家族、ま
たお世話になっている諸先生、皆さま
のお蔭です。心より感謝し御礼申し上
げます。

本当にありがとうございます。

私自身、このような賞はいただけな
いと思っていました。

毎年、新作名刀展に出品し、その度
に課題が増し、何が違うのか、どうす
ればいいのかと悩み、諸先生方に相談
しました。それからどう構成し組み立
てるか、少しでも良い刀が出来るよう
に鍛錬し、仕上げ、出品する。結果は
やはり…。

特賞の壁は厚く高いものと痛感し、
これは自分には無理だなと諦めかけ、
また悩み、考え、諸先生方に相談し、
励まされ言葉をいただきました。

「君はそのままでもいいよ。今やって
いることを、そのまま諦めずにやり続
けなさい。そうした方がいいと思うよ」
と言ってくださり、また前に進みます。
そして、今年も出品しました。

いつものように、結果通知が届き、
妻が

「通知来てるよ」

「そうね、見ていいよ」

「そう、じゃあ見るよ。ん？ 何処
見たらいいと？」

「何処で、結果なになに書いてあ
るやろ」

「ん？ ああ、公益財団法人日本美
術刀剣保存協会会長賞…」

「あ、それは主催者、協会の名前
たい」

「え、そげん書いてあるよ」
「ちよつと見せてんね」

「ん？ え、嘘やろ、誰かと間違え
るとじゃなか？ え、本当に信じ
られん！」

何度も見直し、本当に間違いではな
いんだな。夢を見ているようで嬉しく



優秀賞受賞者（作刀の部）

て。本当に会長賞をいただいたんだ。

直ぐにお世話になった方々に結果を
報告し、「本当に良かったですね」と自
分のことのように喜んでくださり、そ
れでまた自分も嬉しくなりました。

皆さまの気持ち为本場に有り難く、
感謝の気持ちでいっぱいです。

しばらくして、来年はどうだろう、
また同じように作れるだろうか。既に
プレッシャーがのしかかっています。

今回の作刀に満足せず、更に向上心
を高め、日々精進していく所存です。
本当にありがとうございます。

淡々と

高田欣和

(義景)

十数年前、日本文化への憧憬の念を
抱いたまま三十代を迎え、遂に一念発
起し、初めて師匠の元を訪れた日…玄
関の前で何度も何度も躊躇しながら、
震えた手で門を叩いたことを今でも鮮
明に覚えています。

入門を許されて心嬉しい反面、三十
代から新しい道を歩むことの難しさに、
苦心惨憺していました。

才能と努力。

師匠の何気ない言葉に何度も押しつ

ぶされそうになりました。

しかし、ふと見ると師匠は常に淡々
と仕事をこなしています。流れる水の
如く…理路整然と、しつかりと…

昔から名だたる刀工は、全て師匠の
ように淡々と仕事をこなしていたと気
付かされました。実際は考える暇など
なかったのでしょうか。単純に、数を作
れば上手くなる。それこそ昔は、現代
刀工にはおそらく考えもつかない程の
本数を作っていたと思います。しかし
ながら、生業としての現代刀工には、
作りたいのに作れないもどかしさも現
実としてあるのです…。

名刀は見れば見るほど美しく、また
その刀工の技量の高さ、映りや地鐵な
ど全てにおいてとても奥が深い…。

刀の美しさは、その機能美にある。
師匠の重要な教えです。それらを如
何にまとめるかが、永遠の課題である
と考えています。この辺りのバランス
が現代刀工の個性を表すものだと思
います。

しかし勉強をすればするほど、奥が
深く言葉に出来ないものがあります。
気が付けば十数年…。今回、優秀賞
をいただくことが出来ました。これか
らも師匠の教えの通り、機能美を損な
うことなく、出来る限りの数を淡々と
こなし、日々精進して自分の個性を取

り入れながら、自然な刀の美しさをこの手で作り出していければと、改めて思いを定めました。

まだまだ先は長い、深い…。

最後に、今回師匠をはじめとして、自分の刀に関わる全ての方々に、心から感謝を申し上げます。

ありがとうございます。

(優秀賞受賞)

目標

安藤 祐介

(広康)

この度、優秀賞をいただき、ありがとうございます。

優秀賞を目標にしていた私は、封筒を開けた瞬間、「優秀賞」の文字に嬉しさと驚きを感じ、表彰式に出席した際、「短刀・剣の部」第一席と知り言葉にならない程、喜びを感じました。

私は、刀剣の歴史で聖地とも言える長船で作刀し、製鉄の聖地・奥出雲の日刀保たたらで村下養成員としてたたら操業に関わることができるといって思っています。

最後になりましたが、新作刀の発表の機会を作ってくださいる公益財団法人

日本美術刀剣保存協会、作刀の場を提供してくださる瀬戸内市立備前長船刀剣博物館、日々応援してくださる皆様

に厚く御礼申し上げます。

刀身彫の部

挑戦

片山 恒

(重恒)

この度は、荣誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。御指導、御支援下さった多くの方々あつての受賞であると思っております。厚く御礼申し上げます。

刀身彫刻をするモノは誰しもが一度は挑戦したいという日本号。多くの名匠が様々な解釈の作をのこしています。仙寿師匠の解釈した作品を見た修業時代より、いつかは挑戦したいと考えていました。

「来年は大河ドラマで黒田勘兵衛をやるらしい」と聞いた平成二十五年春、「この機会に！」と満足刀匠に作刀を依頼しました。ですが出来上がった鐘



優秀賞受賞者 (刀身彫、彫金の部)

に圧倒され、自分の力不足を感じ、慙を入れることが出来ませんでした。

その後、出品作等に樋中俱利伽羅を彫り、一見、何の変哲もない「樋」ですが、この各部分を個別に彫りながら一本の連続した樋に見えるように整えることは大変手間がかかり、高い技術も必要だと分かりました。けれども、ここは拘らなければならぬ所だと思ひ、樋中の彫りの経験を積みつつ、様々な試行錯誤に数年費やしました。

そして、新刀剣博物館が出来るといふ時、技量もわずかながらも上がったと自負できた自分は、この機会に合わせて挑戦しようと考えました。

デザインも古名作を単純に写すのではなく、平成の自分の彫りに挑戦しようと考えました。師匠の彫り、木彫、水墨画等を参考に下絵を繰り返して、名作の意匠を損なわず且つリアリティのある意匠を模索しました。特に顔の表現に重点を置き、現代的な要素を入れた精悍な顔を目指しました。

また、龍をより立体的に見せることにも挑戦しました。立体感を出すには樋の両端を深くすると簡単ですが、三角鐘故に深く出来ません。浅い彫りで龍の荒々しさと立体感を出すことに悩みました。そのため肉取りや鱗の造形を工夫し、仕上げはわざと荒くして質感の深みを狙ってみました。刀身彫刻として評価が分かれるとは思いますが、狙った効果は出せたと思います。さらなる仕上げの工夫を模索していきたいと考えています。

現在の刀剣博物館完成記念に作られたという苔口師の彫り、仙寿師匠の彫り、これら素晴らしい目標は、自分が経験を積み重ね様々な彫りに挑戦すればするほど、差が開き遠のくような気がして、時に意気消沈することもあります。けれど、挑戦することは楽しいことも多くあります。目標が高くそばえてこそ挑戦のしがいもあります。まだまだ挑戦することの方が多く自分は、



努力賞受賞者（刀身彫、彫金の部）



努力賞受賞者（作刀の部）

彫金の部

終生精進

川島義之

この度は、優秀賞をいただきありがとうございます。ありがとうございました。

長い間、文字透し鐔を製作し出品させていただきました。鉄地文字透し鐔を見て川島作だといってももらえるようになり、嬉しく光栄に思い、一つの作域で今日までやってきてよかったと思っています。

楽しみが沢山あることを嬉しく思っています。これからも、より一層努力して研鑽して参りますので、御指導御鞭撻のほど、宜しく御願ひ申し上げます。

最後になりましたが、このような発表の場を提供してくださった日本美術刀剣保存協会の皆様へ感謝し、受賞の挨拶とさせていただきます。

本当にありがとうございます。蛇足ですが、何方かがこの鐔を手元に置き未永く愛護としていただけるとを切実に願います。（優秀賞受賞）

文字透しに仕える伝語、漢詩はないかと、機会あるごとに探しています。出品予定作を日々楽しみながら、一年がかりで製作していますが、気が乗らない時もあります。また、一時期より根気が続かなくなってきたと感じますが、感覚を忘れないように短時間でも鑿、糸ノコ、鑿を手にし製作に励んでいます。

製作した鐔を後から見て、何となく納得出来ないこともあります。特に鑄は決して満足したことはなく、反省することが多々あります。

液種を変え、再鑄付け、手入れを繰り返しますが、鑄の奥の深さを痛感しています。これからも、古名鐔に一步でも近付ける作品を目指し、技術の向上を図り、さらなる精進を重ねる所存です。

今後とも諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

祖母の遺言

伊藤桂子

(恒颯)

「お金も地位も名誉も時代に愛された証に過ぎない。季節が変われば消えてゆく淡雪のようなもの。目先の

ことに惑わされず心にしっかり守り刀を持つていなさい。ひとたびことあらば迷わず剣を取り、己の守るべきものを守りなさい。」

明治生まれの祖母は遺言好きで、会うたびに様々な遺言を残しましたが、これはそのなかでも、武家の出の祖母らしい忘れられない遺言のひとつです。刀装具はなぜこんなにも美しいのでしょうか？ それは戦いのなかに在っても「大切なものを守りたい」という純粋な想いが込められているからではないかと思っています。私が武器である鐔を制作するにあたり、最も大切にしていることです。

恵まれた平和な時代にあっても、望まない不幸な時代にあっても、いざという時には、しっかり大切な人を守る実用的な強度、重心バランス。時にデザイン性と実用性が折り合わない時は、泣く泣く実用性を優先するようにしています。

そして、美しさは心のために、何を見ても人の心を失わないように、美しく、美しく、より美しく。願いを込めて創っています。

今回制作した舞蝶図透かし鐵鐔は、新刀剣博物館の竣工を伺い、縁起のよい凶案にいたしました。再生のシンボルである鋼の蝶が右肩上がり「舞い」

沢山のお客様と幸運を舞い込んでくれますように。

最も制作に苦心した斜めに透かした螺旋状の帯は、強度に問題のないぎりぎりまで薄く攻め、拵にして演武すると居合の基本四十五度で線状に変化し、蝶だけが舞い上がるようにデザインしました。

まだまだ未熟で思うように形にできませんが、刀剣界の新たな門出に益々のご発展を願い、想いを込めて制作いたしました。

想えば、偶然伺った備前長船刀剣博物館で片山師匠の勧めで鐺削りを始めた頃には、まさか受賞できるようなことは考えてもみませんでした。糸鋸の張り方から教えてくださった師匠始め、折に触れ様々なことを惜しみなくご助言、ご指導下さいました諸先輩方のお蔭と、心より感謝しております。

本当にありがとうございます。
今後も精進して参りますので、変わらずご指導ご鞭撻を賜りましたら幸いです。
(努力賞受賞)

答 辞

新緑の候、ここに平成二十九年新作名刀展の授賞式をかくも盛大に執り行われましたこと、誠にありがとうございます。ご来賓の諸先生方におかれましては、ご多用にもかかわらずご臨席を賜りました上に、ご祝辞の数々をいただき厚く御礼申し上げます。また、関係各位の皆様温かいご指導ご配慮に對して重ねて御礼申し上げます。

さて、昭和四十三年に開館したこの刀剣博物館も、本年をもってその永い歴史に幕を下ろします。来年一月には両国に新刀剣博物館がオープンします。

今から二十年以上前、刀匠資格を取ったばかりの私にとっては、刀剣博物館で開催される新作名刀展に出品し入賞することは大きな目標でした。上位入賞し表彰される先輩方の姿がとても眩しかったことを今でも覚えています。また、ある年には、刀鍛冶仲間の特賞を受賞することを懸け、だれ一人として受賞できずに、全員で丸坊主になったこともありました。薫山寒山両先生の胸像の前で坊主頭の記念写真を撮ったことも、今では懐かしい思い出です。このように沢山の思い出詰まった刀剣博物館が閉館になることは寂しくもあります。それ以上に、両国に新しい刀剣博物館がオープンすることは、



答辞 久保善博氏

えます。このような状況の中で、新刀剣博物館のこけら落としの展覧会として新作名刀展を開催していただけることは、私たち日本刀に携わる職人にとって、大変な名誉であると同時に大きな励みにもなります。この度の協会のご配慮に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

侍が居なくなつて百数十年、現代において、日本刀文化を受け継いでいくことは容易ではありません。これから、日本刀の魅力を広く紹介するために、積極的に情報発信していくべきだと考えています。そのような意味においても、新しい刀剣博物館のオープンは大きな期待を抱かせてくれます。そして、ここにお集まりの日本刀を愛する方々と私たち職人が一致団結し協力していけば、日本刀文化の将来もきっと明るいものになると信じています。

ご来賓の諸先生方関係各位の皆様方におかれましては、今後ともなお一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。

平成二十九年四月二十八日

受賞者代表 久保善博

写真撮影・トム岸田

